

依而此後御願申上休
庚八月廿一日

進上

役人 印

最後の第十資料について

江戸時代はどうであったか、明治・大正の頃は、当地

からも別府への入湯行きは盛んであった。

大正五年までは佐伯からはまだ汽船がなかった。それ

で多く汽船を利用して来た。

一部の人は自己所有の船に、家業の外に近所の人を便

乗させて別府に往復した。別府では一部の人は船に起居

し、一部の人は街の温泉宿に泊って、半か月位入湯して

帰るのが通例であった。

江戸時代にも多く船を利用したものと考える。陸を往

復するには、佐伯から中ノ谷を越え、野津・大飼・戸水、

セータカアワダソウ

この間、赤水の奥から岩岳に登ったが、驚いたことに竹越峠へ大

けのころ(この谷間)に、セータカアワダソウが群生して、黄色の花をつり

ている。人里から五軒まではなれて、しかも此路は全く草でふさがれている

この谷間は、どうしてこの花の種がはこびれてきたのか。

旧藩時代以来、佐伯地方と津久見を結ぶ最短距離、従って殿塚の

お郡廻りの経路に当たっていたので、手入の行商も、往來する人や牛馬の

通行が多かつたという。

今日羊に三度、造林地に通う人が犬を連れ狼師が通る程度

の峠は、合目ほどまで造林の外、ほとんど人が越さない。

時の勢は何とも致し方なく、そして谷間のセータカアワダソウで

(H)

記録

向蘇・菊池・山鹿・久留米地方
の史跡めぐりの記

本会会長 高水嘉吉

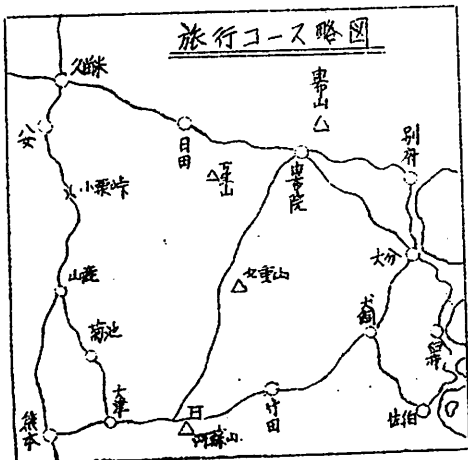
九月二十三日と二十四日に、大分県地方史研究会、大分県地理学会、大分探勝アソコウ会共催の、標記の探訪に参加した。古藤田木、岩田正城両会員も参加して佐伯勢も賑わった。以下探訪の跡を記して、御参考に供したい。

コースは左図の通り、二十三日は大分→犬飼→竹田→一ノ宮→大津→菊池→山鹿。二十四日は山鹿→久留米→日田→玖珠→別府→大分であった。

私達三人は犬飼から乗車した。大分交通の貸切バス二台編成であったが、私達は一号車の指定の席に納った。大分大学の渡辺澄夫、兼子俊一両先生が同行して、説明に当たって下さったことは有難いことであった。

犬飼から熊本県境までの国道も、舗装が完了していて、バスは快適に初秋の山野を走った。後度か

旅行コース略図



通つた道であるが、窓外の眺めは新鮮であくことではない。旅は初めての上地は勿論であるが、再遊、三遊亦よしである。祖母、傾の偉大な姿や、九重連山の怪偉な山容を樂しんでいる中に車は阿蘇谷に入る。

阿蘇の立岳はいつ見ても懐しい。根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳、それぞれ個性を持てながら、相傳つて優雅な阿蘇山を形成している。右手の大観峯は未踏の地、登つて見たいと食指が動くが、今回は出来ぬ相談である。

やがてバスは宮地に着いて、阿蘇神社に参拜する。楡皮ぶきの莊大森嚴な社殿は、祭神の神威をいよ増す思いがする。祭神は健甕龍命(たけいわたのりみこと)で、命は神武天皇の孫であり、九州の経営を命ぜられて下向し、阿蘇谷の開墾を進めた方であつて、大宮司阿蘇氏の先祖とされてゐる。

阿蘇氏は爾來阿蘇神社の大宮司として、又阿蘇谷の豪族として繁榮し、南北朝以後は武將として、菊池氏と共に九州に於ける南朝方の旗頭として活動している。血縁連綿今日に及んでいることも驚異に値する事実で、阿蘇氏の系譜は始祖の由緒正しいことと、その連続性に於いて、皇室に比肩する土のといわれている。

阿蘇氏の各代中、惟豊は室町時代末期の人であるが、祭壇の造営に功があつた。その女は丈夫義鎮の重臣入田親誠(ちかのぶ)の妻であつた。親誠は天文十九年(一五五〇)の二階崩れの変の原因をつつた人で、事変後身の危険を感じて惟豊の下に逃れたが、惟豊はその不義を責めて之を殺し、その首を義鎮に送つた。

宮地を辞して立野を過ぎ、やがて大津に着く。ここは昔の宿場町で、旧藩時代細川侯の参勤交代に當つては、

上りは最初の、下りは最後の宿泊地であつた。大津から古折北上して菊池市に向かう。

菊池市は隈府所を中心にして隣村を合併して、昭和三十三年に市制を施行して今日に至つてゐる。今回探訪は、菊池氏の跡を訪ねることが主目的であるから、当然ここがその場としてとりあげられることになる。

隈府は、中世菊池氏の居城であつた由緒ある古い所で、菊池氏関係の史跡が多い。菊池氏の始祖藤原則隆が、延久元年(一〇七〇)この地に下向して以来五百年の間、この地方に於ける政治文化の中心地として、九州の京都といわれたほど繁榮した。

菊池氏は始祖則隆以来二十六代義武に及び、義武が大友義鎮に殺されて正統は絶えた。観光案内には、初代則隆、十三代武重、十五代武光、十九代持朝、二十代為邦、二十一代重朝、二十二代能運(よしゆき)の墓所が示されているが、全部を訪ねることの出来なかつたことは遺憾であつた。

菊池神社 昔の菊池城の本丸跡に鎮座している。明治三年四月の創建で、菊池武將・武敏・武光の父子三柱を祀る。宝物館には、歴史を物語る古文書、家憲、千本檢能衣裳、能面など豊富に陳列されている。

正観寺 武光の創建で、当時は菊池立山の上位に位する寺として栄えたものであるが、菊池氏の衰微と共に廢絶し、今は廢寺程度の觀音堂と、昔の巨大な礎石を残すのみである。境内に武光の墓所があり、墓所の近くに墓標として植えた楠の大樹がある。

十八外城 菊池一族の出城で、菊池本城を中心に、東西南北に十八の外城を作り、外敵の侵入に備えた。自然の地形を利用した出城である。見晴らしよく、三方が崖といつた要所で、現在ではハイキング等に利用されてい

る。

菊池氏の変遷

六代隆家 宗氏に從う。平氏が滅んで源氏に降つたが、
南方惟深が宿敵として身軀を義経からもらい、之を
斬る。

八代能隆 承久の乱に官軍につき、本領數ヶ所を削られ
る。

十代武房 蒙古合戦に殊勲をたてる。

十二代武時 元弘三年(一二三二)後醍醐天皇の勅をうけ、
鎮西探題北條英時を博多に攻めて討死した。

十三代武重 武時の子、建武三年(一二三六)足利尊氏に
反するが、新田義貞軍に知り箱根に戦い、尊氏軍
上の將士兵庫で防戦した。延元元年(一二三六)帰國、
九州勤王軍の中心として、阿蘇氏と協力して活動し
た。

十五代武光 武光の正平年間(一三三六)に於ける奮闘は、
まなく、大友、少貳、島津を降して西征府の威令は
九州を風靡した。殊に正平十四年八月少貳頼尚を筑
後川に破つたこと有名である。文中二年(一二三三)
に没したが、以後菊池氏は次第に衰運をたどるよう
になつた。

十六代武政 武光の長子、父と共に筑後川の戦に奮闘、
武光の死後今川了俊、仲秋の軍と戦うも勢力振あらず
文中三年(一二三三)父の後を追つて病死した。

十七代武朝 武政の子、今川了俊と度々戦つたが次第に
利を失ひ、弘和元年(一二三九)菊池の本城が陥つて、
九州の官軍は全く潰滅した。武朝は(たけ)に逃れ、
宇戸、八代と居を移したが、南北朝の合一後菊池に
帰つた。

以後、菊池氏は僅かに命脈を保つていたが、
二十四代武経 は阿蘇惟長が入つて菊池を林したもので
あり、

二十五代武包 は、武経が阿蘇氏に復したあと、一渡純
磨武包が入つて菊池を林したものである。

二十六代義武 大友義隆の弟で、入つて菊池氏を継いだ
が、大友義隆に亡ぼされて菊池氏の正統は断絶した。

菊池氏の末路を思ひ、今訪れつづける遺跡を顧る時、
無量の感慨にふけるのは、ふとり筆者だけがはなないで
あう。

かくて菊池市に別れを告げて山鹿市に向つた。山鹿氏
大津と同探南場所であり、又一山鹿千軒たらいなし」と
いわれた温泉の町として発展した。山鹿灯笼の名もよく
知られてゐる。

山鹿で見学したものの只次の通りである。

日輪寺 元祿の昔亡君淺野長矩が沈吉良義央を討つて、
死を賜わつた、赤徳義士四十七名のうち、大石良康以下
十七名は細川家に預けられて、潔く自刃した。其の遺
骸を日輪寺に納め、遺骸塔を建てて祀つた。全山に數万
本のつづきを植えてゐるが、四月五月頃の美觀が偲ばれ
る。

弁慶が穴古墳 熊入町にあり、丘陵の頂部を利用して
築かれた田墳で、内部は切石をもつて築いた横穴式石室
がある。石室は羨道、前室、後室の三室からなり、大き
な石棺が設けられてゐる。此の三室に至るところに赤白
青の三色をもつて、幾何学文様や幻想的な絵が壁面一以
いにえかかれてゐる。

鍋田横山古墳 岩野川にそそぐ断崖に、およそ五十四
箇の横穴古墳が並んでゐる。内部構造は特に変わった点も
ない。

ないが、美門の外壁に各種の原始絵画を浮き彫りにし、特異な地方色を示している。

大宮神宮 景行天皇を祭神とする神社で、毎年八月十六日から十七日催される山鹿灯笼祭には、敏と糊をかけた作られた灯笼が奉納される。その奉納殿を参観したが、全国有名神社の神殿樓閣等の模型の美事さに感歎を久しくした。

これで山鹿での探訪を終った。短い秋の日も暮れた。車は今夜の宿舎、山鹿ブランドホテルに急いだ。

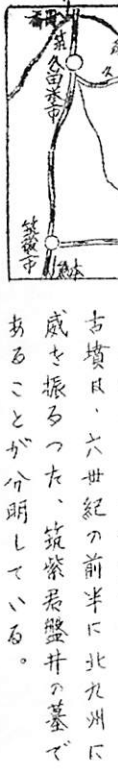
ホテルは新築落成したばかりで、私達七十余名の一行が、最初の団体客ではないかと思われた。夕食は大食堂でとったが、一杯まわった頃、次々にかくし芸かとひ出して賑わった。殊にローカルカラーの豊かなメイドさんの舞踊は快い印象を残して、再遊を誘うものがあつた。

二十三日、山鹿を後にして久留米に向かう。熊本福岡県境の小栗峠は長い大きな峠であるが、車は舗装された国道を快適に進んで八女市に入った。

八女は有名な茶の産地である。土産物はおまわり買あない主裁の私だが、一袋買って持ち帰ることにした。

八女市長峰町字吉田にある。縦一ニ五米、横八五米の雄大な前方後円墳で、古墳の形が完全に保存されている。古墳をめぐって空壕があり、東北の一隅には街頭と呼ばれる一辺約四十米の方形の又画も残っている。

若戸山古墳は規模に於いて九州最大であり、被葬者のはつきりしていることで有名である。この古墳は、六世紀の前半に北九州に威を振るつた、筑紫君磐井の墓であることが分晰している。



磐井は継体天皇(五七〇-五七三)が南鮮經營のため、近江毛野(おひのけののみ)に兵六万を率い、渡鮮するため筑紫まで下らせられた時(五七二)、新羅と結んで乱を起して、毛野臣(軍)の祭向をさまたげた。天皇は物部麁鹿火(もろかのあらかひ)を派遣して、毛野臣を助けて磐井を討たせた。磐井は遂に破れて翌年十一月斬殺されて此の乱も平らいだ。

若戸山古墳は、磐井が生前に構築したもので、墓はあくまで壯大に、又街頭に及びびしい政治のたまをドラマ化した大きな石馬を並べ、微然とその権威を誇っていたのであろう。

若戸山古墳を後にして、バスは久留米に向かう。石橋文化センターに立寄って昼食する。

その美術館で、所謂石橋コレクションを見学したのも、この旅の大きな収穫の一つであった。神品の前に足を止めて讚歎を久しくする。アート イズ ロング(芸術は長い)なるかな。

高良山(こうらやま) 中腹に高良神社と展望台がある。そこまでバスで登る。高良山は標高三一ニ米の小山であるが、筑紫平野を見おろす要地を占めているので、古来しばしば群雄争奪の的となつた。筑後川の戦の古戦場も指願の湖があり、兼子宅生が詳しく説明された。菊池氏もここを前線基地として、武政(十六代)武朝(十七代)は今川了俊、中秋父子と戦つたが敗退して菊池氏を衰微した。

大友義経、義鎮父子は屢々筑後、肥前方面に出陣しているが、高良山に陣を置くことが多かった。眼下に久留米市が展開し、其の外周を筑後川が東から南に彎曲して有明海に向つていゝ景観は、忘れ得ぬものの一つである。神籠石(こうごいし) 高良山に登る中腹にある。大きな切石を一列に長い距離にわたって並べてある。築造の目

射は不明であるが、其の地城の神聖さと象徴するものではないかと言われている。神籠石は高良山だけでなく、西日本各地で見られるものである。

バスは日田市に向つて走る。途中吉井所でブドウ園に立ち寄つてブドウ狩りをしたのも旅の一興であつた。巨峰を口にしてのどをうるおし、自分ではさみ取つたブドウの房を入れた籠を手にして、再びバスに乗る。

初秋の日田、玖珠の里は午後の陽に映えて、あかぬ靴メであつた。万年山(日ぬま)は幾多の歴史を秘めて、旅人の眼を深しませ心を洗つた。水分峠に出て九州横断道路に入る。斜陽にはゆる由布院は詩趣豊かである。由布鶴見の蔭を廻る長い道にふるさとを御愁を感ずるものは、莖後生れのせいであらうか。

かくして、大分に帰着したのは午後七時であつた。途中で降りた人もあつて車内は少しさびしくなつていたが、長い旅の無事を祝ひ、それぞれの収穫は満ち足りた心を抱いて、各々別れを告げた。(おわり)

記録

畑野浦史談会

佐伯市見学を案内して

羽柴弘

去る十月八日、佐伯市内にある史跡や文化財見学の御案内をしたので、おが御土にもこんなになすべし左ものがあふること、一般の方々に告知してほしいので書いてみることにしよう。

標題に畑野浦史談会としたが、実は畑野浦からだけでなく、別物の通り楠本、河内(ごうち)、西野浦、蒲江からも参加者があつたわけで、マイクロバス(蒲江町社会寮)と乗用車(同教育委員会)二台による、同史談会にとつてはまことに画期的な所外見学の催してあつた。

定刻午前北時半、養賢寺の前に私がかつた特快、ちようどバスが着いていて、皆さんそろそろ車から降りていなるところであつた。迎える方は林生所から出かけて来られた伊賀さんと私の父、畑野剛と遼彦の方があるとのことでははるく待へたことにした。

養賢寺の門をくぐつて中にはいると、玄関のすぐ前に亭々と高くそびゆるクロカネモ子(一石ソゴと呼ぶ)、枝もたわわに赤い実をへかけている。(去年は間もなくひよどりやに喰いつくされて淋しかつたが、樹勢も旺んで姿が良い。今年はこの美しい姿を未春まで保ち、私たちが眼を深しませて見たいものである。

やがて双方頼がそろつたので、一同打ちつれて本堂におかつて着坐、近藤謙太郎(河内、向原寺の住職)の読経あつて拝礼する。そして内陣に入り彌弥壇近くまで接近して、改めて御本尊釈迦如来外諸仏を拝する。仰ぎ見て慈悲に満ちた御相顔と、きらびやかな莊嚴におのずから合掌したい気持ちになる。向つて右側は歴代住職の方々の位牌、左側はこの寺の大檀那である毛利家歴代藩主、並に奥方の位牌と、この形式はどこのお寺でもこの様である。近藤師は丁寧に解説下さる。

ついで近藤師に導かれて位牌堂にまわり、本堂の裏縁を通つて書院に入り、代高泰公、八代高標公の書を拝見する。ここで両史談会の代表者は挨拶を交わし、私から今日の見学コースについて、日程を申し上げた後、一同